

都留文科大学

地域交流センター通信

vol.08

Ch i i k i - K o u r y u C e n t e r N e w s L e t t e r

巻頭言

旅するリンゴの物語

特集 フィールド・ミュージアム

「自然とともに働いた歴史に学ぶ」

卒業論文・修士論文などにみる地域研究

トピックス・たんぼクラブ始動！

旅するリンゴの物語

分田 順子

2003年9月、在外研究で滞在したベルファストを一年半ぶりに訪れる機会がめぐってきました。再会した友人は、別れぎわに庭のリンゴを一個もいでくれました。それはアイルランドの短い夏の名残のリンゴだったので、お腹でなくバックにおさめて日本までの帰路を共にしたのです。河口湖に帰り着き、バッグのリンゴを取り出しながら、このリンゴを追熟させ種を採って鉢にまこうと思いついたとき、私はこの心弾む計画に、長旅の疲れを忘れていました。

どし、帰るべきところに帰れたという安堵感があります。

福岡から縁もゆかりもない河口湖に移り住んだ当初、私はここでどう根を下ろしたのか大いに戸惑っていました。そんな時耳にしたのが蝶々の木、ブッドレアのことでした。蝶々が好んで訪れるというその木の苗を通販で買い求め、アパートの前庭に植えさせてもらいました。成長の早いブッドレアは、翌年の夏にはサンマ大の葉をつけてこんもりと茂り、そこから突き出たいくつもの花穂が、早朝から多くの蝶を誘うようになりました。数え切れないほどのアカタテハやヒヨウモンチョウが、それぞれの翅をゆるやかに開閉させて吸蜜する様子は、壮麗と

いっていいほどのです。私は彼らとの夏ごとの再会を楽しみにするようになりました。

河口湖は、私が都留に赴任して以来暮らしてきた場所。そこで、ベルファストのリンゴが芽を出し、すくすくと育ち、やがて実をつけるのを夢見るのは、夏休みの子どもが、今食べたばかりのスイカの種をまこうとするのに似ているかもしれません。それでも今中には、河口湖での10年の歳月を経て、子ども時代の「夢見る力」をとりも

しかし彼らの訪れを待っているのが自分だけではないと気づくのに時間はかかりませんでした。夏のある日、地面に落ちていたアゲハの翅を拾いあげたとき、ブッドレアの葉陰でこちらを振向いた誰かと目があつたのです。カマキリでした。私はその日初めて、彼らがしとめた蝶のどの部位を食べるのを知りました。ブッドレアを舞台に、冬にもいくつかの発見がありました。葉をすつかり落とした一本の細枝に、シジュウカラが飛来したときのことです。細枝はほとんど揺れませんでした。彼らがいかに軽いか、目に見えて判った瞬間でした。

河口湖に自分の庭や土地はなくとも、ブッドレアの茂みに始まり、私

た本来の力が引き出される空間でもありました。

なつたでしょう。同胞や仲間との絆は、沈黙によって保たれてきたのです。しかし、そこには孤立や迫害を恐れず、あらためて自分のよりどころを求め直す女性たちがいました。彼女たちのつづるドラマには、北アイルランドという地域を、そこで生きようとするすべての人に開かれた再生のスペースにしたいという望みがこめられています。

たちが経てきた時やことばの壁を越えて、日本に伝えようとするとき、私はまた夢をみているのかもしれないけれど人々が「もう一つの世界」のビジョンを求め、そこで生き直したいと願っているとするば、ベルファストの物語は、日本でも根づくに違いありません。河口湖で昨年六月に芽生えたベルファストのリンゴが、長く厳しかった冬を越え今春再び芽吹いたとき、私はあらためてそう思いました。

引き裂かれた大地に希望の種をまくような仕事を可能にしたのも、「夢見る力」でした。彼女たちの物語を、私

（ぶんた じゅんこ 本学比較文化学科教員）
* 図書館のヒートマップにも何本か植えられています。



森嶋基進に共感するフィールド・ミュージアム

自然とともに働いた歴史に学ぶ

今泉 吉晴



私たちがくらす都留といわれる地域は、
なぜ、これほど自然に近いのでしょうか？

松尾芭蕉は1683年、谷村の桃林軒に逗留して田原の滝を訪れ、一句よみました。

勢ヒあり 氷柱消えてハ滝津魚

現在は、東京電力の水力発電所に水をとられて迫力を失った田原の滝も、かつては豪快な滝音で知られ、

「東岸より望めば、断岸より飛流すること七八丈。巨流の危岩に懸かるさま、綿を投ぐるが如く、風色絵のごとし」

といわれました。注目すべきは、谷村と十日市場の間にあるこの大滝が、富士山の麓の始まりと見なされていたことです。甲州街道から富士道へと登ってきた富士講の人たちは、この滝で身を清め、さあ、いよいよと、富士登山にかかったのです。

古い時代の人々が、富士山麓は十日市場まで、と定めたことには、現代の私たちが忘れた、自然を見定める広い視界が働いていました。十日市場には、富士山の伏流水がわき出す湧水口がたくさんあって、今日、十日市場湧水群と呼ばれています。これに似た富士山の湧水群は西桂町にも、暮地にも、あるいは富士吉田にもあるのですが、すべて十日市場より富士山によった側にあり、十日市場は富士の豊富な伏流水がわき出す最後の場所です。これら富士のわき水の有り難さを知る古い時代の人々は、わき水が得られる地域を「くくり」にして「上郷」と呼び、富士山の山麓のうちと考えたのです（「上」とは水源の意味です）。

現代の私たちも、十日市場のわき水を取水する都

留市の水道からふんだんに上郷の水を飲めるとは、なんとすばらしいことではありませんか。しかし、そのことは私たちが先人の大きな自然認識から受け取るご利益のほんの一部にすぎません。上郷という地域認識は、今を生きる私たちに、歴史のある共同体には、そのくらしをささえる豊かな自然の基盤がある、という大切な事実を思い起こさせるところに、意味があります。

私は都留に越してきた二十数年前、山の斜面の木の本一本をながめてくらす自然の間近さに感動していました。日々、自然と接することで、たくさんの発見がありました。ムササビが神社の境内の小さな森にすんでいて、懐中電灯一つで観察できました。なぜ、ムササビは人を避けないのか、それは自然と接する経験から浮かび上がった私にとっての新たな謎であり、その謎解きが、私の研究課題になりました。

人に巣を見つけたらキツネは、ただちにその巣を放棄して、別の巣に移り住みます。ところが、ムササビは早朝に朝帰りしてきて、私が見ている前で、木の上の巣にもぐり込み、そして、夕方になると、私の存在など無視するかのよう悠然と巣をでていきました。ムササビが人を恐れない謎、あるいはムササビを恐れさせずに観察できるワケを知ることを通じて、私たちは、動物との平和な出会いの空間を提供するというフィールド・ミュージアムの考えを発展させました。そして、地域での自然との（動物との）出会いの経験をも多くの人に伝える、本を作りました。もし、本を読むことが、森にかけて、ヒメネズミやカワネズミに出会うことに通じるとしたら、その本はとてもロマン



都留の溪流でヤマメを捕らえたカワネズミ。流れの強い溪流でも巧みに泳ぐ

チックなフィールド・ミュージアムのガイドブックといえないでしょうか。

でも、フィールド・ミュージアムの目的は、動物との出会いの空間を準備する、ということに留まるものではありません。動物たちも、私たちと同じように、いや私たち以上に、環境とよい関係をつくって、くらししています。動物と出会うということは、動物のしぐさから自然とむすんだくらしの広がりや深さを察知していく、ということです。それは、自然の全体の動向を察知していくことにつながります。私たちは、個々の動物や自然現象との出会いを楽しみただけではなく、それを通じて自然の全体をつかみ取ろうとしています。古人がなした「十日市場までが富士山麓」といったような、大胆で、自然のめぐみをみごとに捕らえた認識を、私たちがフィールド・ミュージアムに取り込みたいと望むのは、そのためです。

谷村が生んだ偉大な文人、森嶋弥十郎基進（1761～1821年）は、私たちの大学の裏山である尾崎山（海拔968メートル）に注目して、こう書いています。

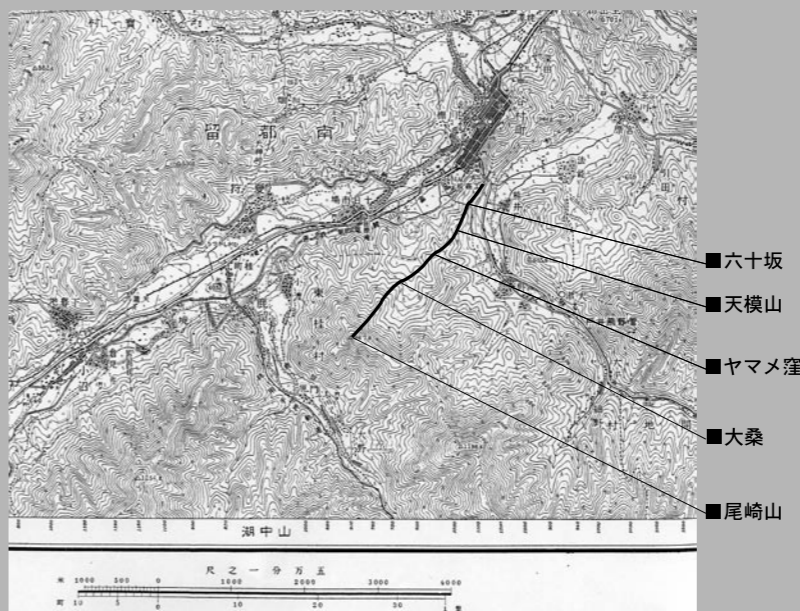
「尾崎嶺より真の方へ下り小嶺となり、東に嶺続き大桑、綿窪、ヤマメ窪、辻窪、天模山を経て六十坂に至る。小野村へ越る小坂なり。又金山を過ぎて鍛冶屋坂に至る。尾崎下より此に至て、式拾町許り」（『甲斐国志』1814年）

20町とは、2キロメートルあまり。この記述は尾崎山の頂上から始まり、幾多の峯と谷に分かれて都留文学大学のキャンパスをかこむ尾崎山の山腹を横断して、鍛冶屋坂へと下る（今は失われた）一つのコースを記述しています。私たちはこの記述から地図上にこのコースを描けます。また「小野村へ越る小坂」とは、おそらく、今は元坂と呼ばれる峠道でしょう。「大桑」は、今日、大学からうぐいすホールにある広い自動車道が最初に橋で渡る大きな濁沢です。いったいなぜ、森嶋基進は、当時、無数にしろされていたはずの山道の中から、この一つのコースだけを描いてみせたのでしょうか。また、描くことができたのでしょうか。

鍛冶屋坂は道志村方面から谷村に入る街道筋にあつて、いわば谷村の町の入り口です。森嶋基進は、尾崎山の頂上から谷村の町へと下る最短のコースを記述して、尾崎山の自然と谷村の町のくらしとの密接な関係を明らかにしたのです。尾崎山には無数の山畑があり、柴山、薪山、そして馬草山がありました。尾崎山は一日に二往復できるくらしの生命線として、周辺の集落のくらしをささえながら、その全体がさらに谷村

のくらしをささえ、そして文人と山人との交流のネットワークを作っていたのです。森嶋基進の言葉は、それら大きな関係の全体を簡潔に、イメージゆたかにあらわしています。

このような尾崎山との親密な関係に加えて、谷村の町はまた、桂川とのよい関係をつくりだす、絶好の位置にあります。田原の滝の大きな段差を利用して、堰をきずき、桂川の水を取水して田畑の灌漑用水にして食糧の生産力を高め、また、ゆたかな生活用水、産業用水とし、山にはさまれた狭い谷間に都市的生活を生



「大日本帝国陸地測量部 明治二十一年測図昭和四年第三回修正測図」谷村をもとに、『甲斐国誌』のルートを描く

み出しました。谷村の町が繁栄しないわけがありません。谷村城主秋元喬知の家老高山傳右衛門が、深川の庵を焼け出された松尾芭蕉を谷村に招く才覚と財力をもっていたことは、その顕著なあらわれといえます。

私たちのフィールド・ミュージアムは、自然との楽しい出会いの経験が育む、豊かな自然認識の構築をめざし、人を育てる、自然とのよき関係の回復をはかります。芭蕉の句を読んで田原の滝の現状を見るなら、芭蕉が見たとおりに再生したいと願うのは、夢とはいえないはずですよ。

（いまいずみ よしはる・地域交流研究センター特別非常勤講師）



キャンパス（写真左）を取り囲むように尾崎嶺の稜線がのびる（中央奥は御正体山）

自然の楽しみは小さくて大きい。森がつなぐフィールド・ミュージアムと図書館 「メグルミの木が枝をまじりつる」の閲覧室

青池恵津子

都留市立図書館は、文化会館（中央3丁目）の2階にあります。文化会館は、中央公民館、老人福祉センター、情報未来館、大ホール、会議室・研修室を備え、老若男女、市民の憩いの場、生涯学習の拠点となっています。

近年、都留でも商店街に閉じたシャッターが目立ち、まちが年々さみしくなっています。ここ文化会館には、朝から夜遅くまで多くの市民が集い、まちの中心らしい賑わいを創出しています。図書館も規模は大きくありませんが、「身近で暮らしに役立つ図書館」をめざして活動しています。日々の読書推進活動のほか、お話し会、本の展示会、映画会、郷土資料利用相談会、乳幼児の読書支援事業、秋の読書週間には「図書館まつり」等、さまざまな催し、事業を行なっています。これらは地域のボランティアの方々のご協力で作っています。

そして都留文学大学の学生とその関係者も図書館の大切なサポーターです。6月の「こどもにすすめたい本の展示会」では、『フィールドノート』編集員である成瀬洋平さんにポスターの原画を描いていただき好評でした。この時期、館内に季節の彩りを添える七夕飾りの笹竹は、フィールド・ミュージアム学芸員*である十日市場の中野新作さんに提供していただいています。さらに今年の夏は、かつて図書館行事にお手



写真左・館内にたてられた七夕飾り
絵・成瀬洋平さんのポスター原画

伝いをいただいていた児童文化研究部有志の皆さんがお話会にやってきました。

朝、図書館の山側（白木山）の窓を開け放つと、森のさわやかな風が入ってきます。鳥のさえずりもにぎやかです。春には蝶、夏にはトンボが閲覧室を舞い、秋には駐輪場の頭上にあるメグルミの大木がたくざんの実を落とす自然豊かな図書館です（今年は七夕の日に図書館員がオオムラサキを初めて見ました）。

今、社会教育の施設はどこも、指定管理者制度**への移行という民間委託問題で岐路に立たされています。これに対して自治体で働く職員は、今まで以上の公的サービスを提供するため、非常な努力を重ねています。私は、昨年の4月から市立図書館で働いています。この素敵な森の図書館をより多くの市民、そして都留大生の皆さんに利用していただけるよう、地域交流センターを通じて大学と連携してゆけたなら、都留市の図書館ならではの活動ができるのではないかと期待しているところです。

（あおいけ えつこ・都留市立図書館司書）

*12・13頁に関連記事があります。
**フィールド・ミュージアム部門では、地域で一芸に秀でた人を「学芸員」と定義しています。
***2003年の地方自治法の改正により（施行は同年9月）、従来の「公の施設」の管理委託制度が改められ、自治体には広く（民間活力）にゆだねる選択肢が生まれ、全国各地で論議をよんでいる。【編集長】

◆十日市場の人々がひそかに「心中山」と呼ぶ尾崎山に、山小屋を建てる話から始まります。それがフィールド・ミュージアムを考えるきっかけになりました。ムササビ、リス、野ネズミ、モグラのそれぞれと仲良くする方法、そのための森づくりの本です。

『空中モグラあらわる』
今泉吉晴著
岩波ジュニア新書



想像とはちがった田植え

伊藤希

私は今まで田植えをしたことが無かったので、水田のなかで転んでしまうのではないかと不安でした。

じつさいに水田に入ってみると、予想していたよりも土が深く、膝の上の方までつかりました。そのため、思ったよりもしっかりと立つことができましたが、身動きはうまくとれませんでした。水田のなかは泥の層があり、その下に硬い底がありました。泥の上の部分は温かく、底の部分はとても冷たかったです。

最初は自分が足を入れたせいで、苗を揃えて植えるために引いた線を消してしまったり、植えた苗の列が曲がったりしました。慣れてからも列が曲がっているのではないかと、不安でした。

指導してくださった渡辺宗男さんと田植えをして感じたことは、自分が想像していたのとじつさいにやってみるのでは大きく違っていることでした。じつさいにやってみることで、これまで学んだ知識にはない発見や体験ができました。とても楽しく、また私にとって大切な価値のある田植えでした。

(いとう のぞみ・社会学科1年)



自然との一体感を味わう

豊川紗衣子

ずぼずぼと音を立てて泥に沈んでいく私の足もとをアメンボがついっと泳いでいきました。その軽快な動きを見て、思わずアメンボになりたいと思いました。生まれて初めて田植えを経験して、いちばん驚いたのはその歩みにくさです。一歩踏み出すごとにやわらかい泥に足がとられてしまいます。よいしょ、というかけ声なしには、泥に埋もれた足を引っ張り出すこともできませんでした。とんでもなく重い足かせをはめているかのようでした。

じりじり照りつける日差しのもと、それでもなんとか苗を植えました。あらためて苗を植えた水田を眺めると、長く険しい道を歩いてきた旅人の気分になりました。この小さな苗の行列も、きつと秋には黄金の稲穂の波になるのだろう、そう考えるとうれしくなります。

ほんの2時間ほどの短い田植えでしたが、私にとってはふだんの授業では学べない、自然との一体感をつよく感じることでできた貴重な体験となりました。

(とよかわ さいこ・国文学科1年)

果樹園は私の楽園

深澤麻夕

7月2日に、中屋敷フィールドでウメとプラムの収穫をしました。この果樹園を背にすると、都留文科大学の建物を目の前に見渡すことができます。この果樹園では、私たちはこの1年、枝の剪定などについていねいな世話をしてきました。

まずはウメの収穫。1本の木にしつかり実ったウメを、参加した6人のメンバーで摘んでいきます。梯子も使って作業をすすめ、用意していたビニール袋はあっという間に梅でいっぱいになりました。収穫したウメは、梅酒や梅ジュースにします。

2本のプラムの木には、赤く熟した実がたくさんできていました。太陽の光を浴びて立派に育ったプラムは、少し布でこすっただけで顔が映るくらいにピカピカになります。私はほとんどその場でプラムを食べてしまったのですが、それでもみんなで集めたプラムは30個ほどになりました。

この場所にはサルやイノシシなどが頻繁に出てきます。さまざまな動物たちと出会うことができ、また、どうしたら自然とのいい関係ができるのかを実地に学べるこの果樹園は、私にとってまさに楽園です。

(ふかさわ まゆ・比較文化学科4年)



一瞬の出会いを楽しむ観察会

前田恵子

7月7日、十日市場の中屋敷フィールドでおこなわれたホタル観察会は、9名が参加しました。柄杓流川沿いを歩いて行くと、黄色に光る点をみつけました。そこに一気にみんなの視線が集中して静かになり、目にはホタルの光、耳には川の音からなる世界が広がっていました。さらに川沿いを先へ進むと、ゆつたりと光るたくさんホタルを観ることができました。

7月11日には鹿留にある大沢フィールドで野ネズミ観察会がおこなわれました。参加者は6名。フィールドに到着したのは、すっかり暗くなった午後8時頃でした。ヒマワリの種を置き、観察小屋の窓を外して観察の準備をしました。

観察を始めて30分はまったく反応がありませんでした。きょうは現れないのかなあ、と思ったとき、野ネズミが窓のそばを走る姿を一瞬、目撃しました。次こそじっくり姿を観察しようと身を乗り出しました。

しばらくすると、ふたたび野ネズミが目の前を走り去りました。あまりに動きが素早いので、ヒマワリの種を食べる様子などはよくわかりません。しかし、小さく、敏捷な姿は目にしっかりと焼き付いています。

この体験は次の観察へのエネルギーとなりました。

(まえだ けいこ・初等教育学科3年)



『野ネズミの森』
今泉吉晴著
フレーベル館

◆アカネズミは、固いオニグルミの殻に二つの穴をあけて中身を食べます。アカネズミはどのようにして穴をあける位置を学ぶのでしょうか。著者は、アカネズミがクルミの殻の中心を測る方法を明らかにします。

◆カワネズミは、山間の渓流に暮らすモグラの仲間です。これまで野外での観察は難しい動物と言われてきました。著者は、都留市の川で観察の方法に工夫をかさねながら、カワネズミの暮らしを明らかにしていきます。カワネズミの視線から森や川の魅力をさぐる本です。



『カワネズミの谷』
北垣憲仁著
フレーベル館

自然と対話できる喜び 私を育てたフィールド・ミュージアム

佐藤洋

キャンパスにある「ムササビの森」は、ムササビ・人・森との距離を教えてくれた私の大切な居場所でした。今から11年前の大学2年のとき、「ムササビの森」に巣箱を架け、自然科学棟2階の研究室からいつでも観察に行けるようにという目的でゼミ活動を楽しみました。

ムササビと森は毎日、同じ顔（風景）ということではなく、いつもちがう発見を私に与えてくれました。森は近いから、いつでも出かけることができ、またいつでも飽きることなく観察できました。とくにムササビは、その動きが手に取るように分かるので刺激的でした。枝から枝へと滑空してみたり、枝と枝の間をすりりと抜けたり、巣箱から出たかと思えば4時間後に巣箱付近に戻ってきたりして、森にいますとムササビと同じ時間を共有できたのです。私にとってはそれまでにない新鮮な感覚でした。

森のなかで観察していると、アカネズミが足元を通り過ぎたり、雨が降り出したかと思えばそれがムササビの糞だったり、早朝にはリスと出会ったり、雪の日はノウサギの足跡やテンの糞を見たり、いろいろな経験することができました。



写真右・1995年冬、「ムササビの森」で撮影した、巣箱をかけたアカマツ
写真左・2005年7月撮影の現在の枯れたアカマツ（写真中央）

観察していると、さまざまな疑問ができました。しかしいまだに解決できないものもあります。このように何十年も疑問を抱いて、森の時間、ムササビの時間にあわせながら、ゆったりと進んでいくことが、自然とつき合ううえで欠かせないと感じています。森のなかで観察をはじめ、しだいに私は「もの」を考えることが楽しくなりました。

先日、久しく遠ざかっていた「ムササビの森」へ行きました。すると、むかしゼミで巣箱をかけたアカマツの木が枯れていました。ムササビを観察してきたからこそ、ムササビと同じようにこのアカマツが枯れる悲しさを感じることができたような気がします。

自然と対話できるゆたかな空間、「森」がこの大学にはありません。つねに森は人間に何かを訴えています。人間に考えさせるだけの不思議な力をもっています。私は、野生動物と森とたくさんの人に育てられました。これからもフィールド・ミュージアムの活動に参加しながら、ムササビやさまざまな動物たちの暮らしやすい森づくりに取り組んでいきたいと思っています。

（さとう ひろし・宝のやまネイチャーセンター学芸員）

「ムササビの森」の由来

井川絵美

私が「ムササビの森」を観察の拠点にしたのは、身近なキャンパスに暮らすムササビのことをまず知りたかったからです。森づくりの計画がちょうど動き出したときでもあり、私たちが森に手を加えることでムササビがどう応えてくれるのか、また観察することで私がどう変わっていくのかを知るよい機会でもありました。

森へ通い始めたころは、入り口付近から森のなかを見回すだけで精一杯で、物音がするたびにびくびくしていました。私にとっては、まずは夜の闇に対する恐怖心を克服することが課題でした。時々キュルキュルという鋭い鳴き声を聞くことがありましたが、それがムササビの鳴き声であることはあとから知ったのです。

ある時、ふと振り返ると2頭のムササビが木を駆け上って行くのが見えました。気づかなかっただけで、ムササビはずっと近くにいたのです。その時はただうれしくて、この体験を誰かに話したいという気持ちでいっぱいでした。それからは、森の暗闇が怖くなくなりました。

ムササビに会ったときの喜びはいつでも新鮮なものです。この楽しみを大切にしながら彼らの暮らしぶりについても少しずつ知ることができたらいいなと思います。今日も「ムササビの森」に通います。

（いがわ えみ・社会学科4年）



写真右・「うら山観察会」の観察会
写真左・井川絵美さんが観察する巣箱

参加者で育つ観察会

小口尚良

「うら山観察会」の発足は1989年です。そのころ、都留市のフィールドミュージアム構想を「ムリネモ協議会」*が進めており、そのなかの教育普及部門としてはじめられたのがこの観察会です。

当時は動物たちとの出会いの場「エンカウンター・スペース」の研究が進められており、ネズミのエンカウンター・ボックスやチヨウの来る公園などが考案・実践されていました。「うら山観察会」は、その研究の成果を取り入れた先進的な観察会としてスタートしました。

以来、ネズミやリス、ムササビなどの野生哺乳類やホタル、チヨウなどの昆虫の観察、あるいは自然散策（探検隊）を中心に16年にわたり活動を続けてきました。都留の自然と子どもたちとの橋渡しというのが、発足してから今日までの変わらない目的でもあります。

今後、都留の自然を楽しみながら、その面白さ、大切さを参加者とともに感じていく観察会をめざしていきたいと思っています。今のメインのフィールドは、大桑小屋、上の小屋一帯のエリアです。こうした場所で、関わりをもつ方々と交流しながら、人と生きものがよい関係をもつための考え方や方法を取り入れた観察会を行っていくことで、フィールドミュージアム構想に関わっていきたくと思います。

（おくち ひさよし・都留市立谷村第二小学校教諭）
*「ムリネモ」とは、森の動物であるムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの。



◆「うら山観察会」が発行する壁新聞です。活動の内容を広く知っていただくために、市内の小学校や博物館、図書館、大学の付属図書館などに掲示しています。

『うら山かべ新聞』

◆動物画家の第一人者、田中豊美さんが、都留市宮下の今宮神社に通いつめて描いた絵本です。著者（今泉）は、大木で育ったムササビの子どもの最初の滑空の勇気を伝えようとして、この本を書きました。

『むささびのおやこ』
今泉吉晴
新日本出版社



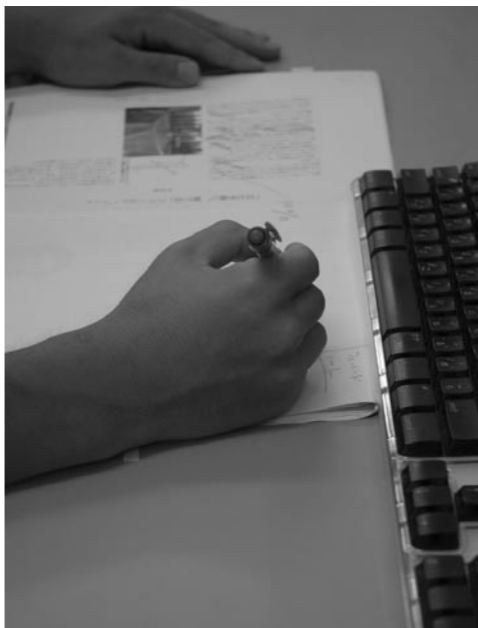
『フィールド・ノート』は形のない博物館

磯崎由香

月刊『フィールド・ノート』は、現在30名の学生、市民の手によって作られています。この雑誌のテーマは「人と自然の交流」で、フィールド・ミュージアムの機関誌として位置づけられていますし、地域交流研究センターの事業の一つとなっています。今年5月に発行3周年を迎え、発行した雑誌は30号となりました。

私がこの編集活動に参加して2年たちました。編集するページは、参加する学生がそれぞれ個人の興味や関心にそって企画を立て、取材を進めていきます。毎月の特集は、この雑誌の「顔」です。長いもので数ヶ月前から取材に入り、一枚の写真にも構図などにこだわりながら仕上げていきます。いかに読者にわかりやすい言葉で書き、レイアウトを整えていくか、私の課題は尽きません。みんなで原稿をチェックして校正を繰り返していくと、この雑誌が地域との橋渡しをしていることをよく感じます。

また、地域のみなさんの温かい励ましも私たちの大きな支えとなっています。取材先でお世話になった方にお礼を兼ねてお渡しするさいにかけられる声。小さな交流ですが、この編集作業に参加しなければ味わうことのできなかった体験でしょう。雑誌自体が編集から製本まで手作りですから、毎号、200部しか印刷できません。それでもいまでは定期購読を希望される方も増え、県内外に60部ほどを毎月発送するように



なりました。発行するたびに寄せられる感想や激励は、私たちの大きな財産です。私がこの活動に参加した目的は、編集の技術を身につけたいというものでした。しかし、『フィールド・ノート』の編集には単に技術の習得だけでなく、地域や編集部の人との交流を通じた自分の成長を促すはたらきがあることも実感できるようになりました。博物館には、「もの」を集め、保存し、研究し、公開する機能があるといえます。いま、私たちが取り組む『フィールド・ノート』は「もの」を集めない新しい博物館の活動を創り出しているような気がします。

(いそぎき ゆか・社会学科4年)

「文化を創り、育てる」フィールド・ノート

中村操

フィールド・ミュージアムの機関誌、『フィールド・ノート』が創刊されて3年が過ぎたと聞いて、日々の積み重ねを感じました。当店の入口横に創刊当時の『フィールド・ノート』を置かせていただいています。創刊2号の特集は「水」でした。私は都留で50年近く生活していますが、「水」は大切なのに、何も知りませんでした。それ以来、毎月、『フィールド・ノート』に掲載される記事を楽しみにしています。

創刊当初は、写真も白黒で、いかにも手作りという感じでした。それが1年もたないうちに、写真はカラーになり、レイアウトもすっきり綺麗になって、一つひとつの事柄に真剣に取り組む姿勢が伝わってきました。

表紙の写真からは、いつも四季折々の一瞬が感じられます。文章だけでなく、写真やイラストからも、都留だけでなく自然への想いが伝わってきます。その想いのこもった『フィールド・ノート』が私の仕事に多くの影響を与えてくれます。

『フィールド・ノート』は、都留の歴史のなかから農業、家並み、生活様式などをとりあげています。ものを創るということは、先人たちがつくってきた歴史のなかの知恵をとり入れ、学びながら今をつくりあげていくものだとは私は考えています。ですから、私はで



バンカムの室内からは、キャンパスと尾崎山の稜線がみとれる



きる限り歴史の源を見るよう心がけています。

川に例えれば、川の水源まで行き、そこからもう一度、その川を見つめなおす。私が『フィールド・ノート』を読み続けているのも、これと同じ考え方が感じとれるからです。文化を創り、育てる姿勢と情熱をよく感じます。これからも毎月、楽しみにしています。

(なかむら みさお・バンカム都留店主)



『生涯学習の新たな地平』
島田修一編
国土社

◆本書の一章「自然と人間の新しい関係をつくる」で、著者（今泉）は、フィールド・ミュージアムという、自然そのものを博物館としてとらえる考えに至った経過を語ります。別の一章、畑潤氏（本学社会学科教員）による「子どもと大人の会話の世界を耕す」は、動物を見るやさしい目に通じています。



『地域の中で教育を問う』
大田 義
新評論
◆著者の大田さんは、都留文科大学の学長として学生の話を一一人聞くうちに、「都留自然博物館」を構想しました。私たちのフィールド・ミュージアムは、大田さんの考えに多くを学んでいます。

価値ある自然の楽しみと発見

今泉吉晴

「大日本帝国陸地測量部 明治二十一年測図昭和四年第三次修正測図」谷村を見ると、尾崎山の高所のほとんどは広葉樹で覆われていたと分かります。地元の人によれば、それらの広葉樹はクリの太木であって、秋にはゆたかな収穫がありました。けれど、クリの木は、戦後、鉄道の枕木にする為に全て切られてしまいました。その後、スギの苗木が植えられ、まもなく放置されて、人々がよくいう「荒廃したスギの森」になりました。ほんの一部でもクリの森を残す知恵があったら、今ごろ、私たちはクリの太木の偉容に見とれていることでしょう。

けれども、尾崎山はまだ荒廃したスギの森に変わったわけではありません。そもそも荒廃したとは、どんなことでしょうか。尾崎山に一歩足を踏み入れてみれば、自ら生えてきた広葉樹にスギなどの植林した木々が負けて、無惨に倒れている、と分かります。荒廃したとは、自然の働きをさしているのです。そうであるなら、自然はスギを倒しながら、毎年、大量の小枝と落葉を土に加え、山の全体をゆたかな土壌でおおっている、と付け加えなければなりません。尾崎山の山土やまどろを両手ですくってみましょう。柔らかく、ふかふかした、美しい土にほれほれと見入り、私たちは何と豊かな自然の財産にかまれていることが、と一驚いっしょうを喫するはずですよ。

アメリカ合衆国のナチュラリスト、ヘンリー・D・ソロー（1817～1862年）は、ギリシア、ローマの古典に遊んだ人ですが、それら素晴らしい本の世界を賛美したあと、こういっています。

「文字ばかりを読んでは、世界のあらゆる物と出来事が、隠喩えいごによらず、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れる恐れがあります。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です」（『ウォールデン』、1854年）

ソローは、毎日、数時間を散歩に使うことができるように、精選したわずかな仕事だけをして生き、世界のあらゆる物と出来事を読みとろうとしました。そして、こうもいっています。

「それほど高度な勉強や研究であっても、私たちが身の回りにある物と出来事に絶えず気を配る必要に変わることはできません」

まさしくそのとおり。「世界のあらゆる物と出来事」といっても、五感が働くのは、それぞれの人の「身の回り」であって、しかも、世界そのものに対してではありません。そこで、私たちは、愛する身の回りである身近な土地、故郷を知ることを通じて、自分をつくり、世界を知っていくのです。私たちのフィールド・ミュージアムも、よく見知ったフィールドの楽しみと発見を分かち合おうという、経験的認識を大切にする運動です。私たちは、ソローのいう「標準語」を遊び、同じくソローのいう「地域語」であり、世界の「方言」である日本語におきかえたりしています。

FIELD GUIDE BOOK 【著書紹介者・今泉吉晴】



「ヘンリー フィッチバーグへ いく」
「ヘンリー いえをたてる」
「ヘンリー やまにのぼる」*いずれも福音館書店

◆ヘンリー・D・ソローの「ウォールデン 森の生活」を学生時代に読んで、以来、生活の指針にして生きたイラストレーター、D・B・ジョンソンが、「ウォールデン」の一節に着想を得て描いた絵本。ソローのくらしが見事な絵に描き込まれていて、小さな田舎町、コンコードを愛したソローの思想と日常生活のじっさいがよく分かる。楽しくソローを理解できる絶好の入門書になっている。



「ウォールデン 森の生活」*小学館

◆この本で、ヘンリー・D・ソローは「天国は地上にある。町のすぐ向こうにある」と書いて、隣人を驚かせました。ソローのいう天国とは自然であり、自然の楽しみです。そこで、ソローはウォールデン池にはる氷の美しさを、多彩に、見事に描くことができました。ソローはまた、「地域には天才、英雄、奇才のすべてがいる」と書きました。そこでソローは、自分が天才と信じるほくとつな木こりの日常生活と人柄を驚くほど丁寧に描く努力を重ねています。

「ウォールデン 森の生活」は、「すべてのアメリカの若者の原風景をつくった」といわれるアメリカ文学の古典中の古典ですが、ソローがマサチューセッツ州コンコードの村を、毎日、数時間散歩して記した観察日記から構成されたもので、書かれていることのすべてがソローの経験にうらうちされたオリジナルな言葉になっています。というわけで、本書にもられたあらゆる言葉が、地域に生きる者の最高の指針になります。



「シートン」*福音館書店

◆シートンは自分は動物を愛しているという自覚に立って、資本の利益を追求するためにはどんな自然破壊にも目をつぶる白人社会の横暴を告発しました。また、先住民から土地を奪って恥じない白人のモラルを批判し、白人は先住民から土地をうばった盗人と公言し、土地を返すべきといい、先住民の生きる権利の擁護者になりました。では、なぜシートンは動物を愛するという一見単純な「思い込み」を、これら広範な価値基準の基盤として社会改革の行動を起こせたのでしょうか。私はこの本で、シートンの幼少時の経験の意味を問うことから始めてこのなぞを追求しました。というのは、人間に不当に搾取される地域の自然に関心をよせる私たちも、シートンのような勇気を身につけたいと望んでいるからです。シートンは地域の自然と深く交わることを通じて、自分の動物への愛を確かなものとし、ソローの「ウォールデン」に学んで、自分の経験（感覚の楽しみ）を何より重く見る生き方に確信を深めました。慣習にとらわれず、自由な心で動物に接することができる子どものあり方を、大学で学んだエリートの認識より好ましいものと確信して、戦争の脅威から子どもを守ったシートンの強さには、はっとさせられるものがあります。地域で生きる者にシートンは真の勇気を与えてくれます。



「シートン動物記」*福音館書店

◆近年、日本は自然の大きな変化を経験しています。クマ、サル、イノシシ、シカなどの大型野生動物が個体数をもうれつに増やし、地域に生きるものに「脅威」となっています。

大型野生動物が誰にも身近だったアメリカ西部の開拓時代を生きたアーネスト・トンプソン・シートン（1860～1946年）は、白人に追われ、殺される野生動物に共感して、日本では「動物記」と呼ばれている動物物語を書きました。シートンは、先住民、猟師、開拓者らの野生動物との出会いの経験に学んで（地域と交流することで）、これらの動物物語を書き、動物文学の父と呼ばれました。ところが、シートン自身は、自分の動物物語を文学とはいわず、「真の科学である」といっています。それはこれらの動物物語の中で、動物の個性、動物の行動圏、個体距離、本能といった、今日の生態学の中心概念を（生態学の確立に先立って）明らかにした、という自負によっています。私たちはこれらの生態学の概念が単なる科学用語として提案されているのではなく、野生動物との共存の理想をめざす中から生まれたものであることを知ることができます。そして何より野生動物を殺しまくる白人の価値観を批判し、野生動物の生きる権利を主張するものとなっているところに注目すべきでしょう。